

## 目次

寄稿: 海外のポスドクフェローさがし (工藤 朗)	1-2	寄稿: 私の大学院選び -ライス大学での院生一年目- (加藤 圭衣子)	5-6
連載: 子連れ留学珍道中(2) -そしてこれから...- (足立 智子)	3-4	連載: 行き当たりバッタリのアメリカ生活23年(1) 大学院1回目 (渡邊 裕子)	7-8

## 寄稿: 海外のポスドクフェローさがし

カリフォルニア工科大学  
工藤 朗

### はじめに

昨年ローレンスリバモア国立研究所(LLNL)でのインターンシップについて紹介した、工藤朗と申します。この夏無事MITを卒業し、晴れてドクターとなりました。去年の10月頃から博士論文と並行して次のポジションも探し、幸運にもカリフォルニア工科大学からResnick Institute Postdoctoral Fellowを頂くことができました。それに伴い9月からロサンゼルス近郊のパサデナ市で勤務しています。今回は日本国外のポスドクフェローシップへの出願について、一体験ではありますがお伝えします。

### 雇われ方いろいろ

Ph.D取得直後、アカデミアに残るならポスドクとして雇ってもらうことが多いでしょう。アメリカでポスドクをする際の給料の出所は幾つかあります。MITで知り合った日本人研究者の間では、海外学振などで日本から支援を受けている方が最も多かったです。次に多かったのは、直属の教授に給料を払ってもらっている方でした。ボスが自腹を切って雇うだけあり、日本から支援を受けるよりもボスとの関係が緊密そうでした。1年目は海外学振、2年目以降は教授に払ってもらおうという方もいました。最も少なかったのが日本国外のフェローシップをもらっている方です。この場合は自分で応募条件に当てはまるフェローシップを探し、必要な書類を提出して、選抜されれば採用となります。競争率がある分、給料が高く設定されています。歴史が長く著名なフェローシップもありますし、設立されて間もないフェローシップもあります。

### 応募条件と提出書類の内容

自分が出願したフェローシップは、後ほど紹介するとおり大学や国立研究所が支援するもののみでした。日本国籍でも大丈夫でしたし、全てMIT外のものだったので所属も問題になりませんでした

(過去にその大学、研究所に一定期間所属した人は制限がかかることがあります)。この場合ボスとして選べる教授はその大学や研究所に所属している人に限られ、ある程度分野も絞られます。ナノ材料・エネルギー工学関連の分野が流行っていて、出願できるフェローシップが多かったのは助かりました。NSFなど政府機関が支援する場合、どの大学の教授も任意に選べるそうですが、米国籍や永住権の保有が条件となっていることが多いです。多くのフェローシップは博士号取得後数年以内の人に応募者を限定しますが、取得後年限が5年以内だとポスドク2回目の方も競争相手になり得ます。卒業したばかりのドクターにとって、業績の量で脅威になります(泣)。

主に以下の4つを提出します。稀に学部以降の成績証明書を提出したこともありました。

- 1) 業績リストを含む履歴書(CV)
- 2) 研究計画書
- 3) カバーレター  
(これまでの研究活動の要約と、簡単な自己アピール)
- 4) 3通のリファレンスレター(推薦状)

業績や推薦状は博士過程在籍の内から意識しておくといでしょう。カバーレターはネットで書き方指南の情報を見つけ、それを頼って自分で書きました。

研究計画書が一番時間がかかります。まずフェローシップごとにボスとして選べる教授の中から、自分の興味のある&専門が活かせるようなテーマを扱っている人を探します。次にその教授にメールをして、自己紹介しつつ応募を支援してもらえるか、採用されたら雇ってもらえるかを訊きます。返信が来なかったり、すでに別の候補者を支援していたりするので、1つのフェローシップにつき3-4人はメールしました。良い返事がもらえたら、その教授の研究

テーマと自分の専門性を突き合わせ、研究計画を練ります。使いたい装置がその教授のグループからアクセスできるものか、実現可能性が低くないか、無難すぎる内容に納まっていないかなどを考えて仕上げます。長さはWordで1ページから5ページ(引用文献別)まで様々です。連絡を取ったうえで、締切の3週間くらい前には計画書に手をつけられればよいでしょう。実は僕はもっと後になって連絡をとりましたが、時間が不足気味でかなり迷惑だったかもしれせん。

事前に現在の指導教官と応募について相談しておくのもプラスです。選んだ教授の中に現在の指導教官の知合いがいたらラッキーですね。中身の良い推薦状を書いてもらえればかなり有利に働くとおもいます。

## 出願したフェローシップとその結果

僕はアメリカ・カナダ・デンマークのフェローシップ8個に出願し、1つ採用、1つは一次選考をパスしたものの落選、残りは全て一次選考で落選でした。フェローシップは競争率が高いので、他のポジションも並行して探すのが定石です。僕は昨夏にインターンしたLLNLの、フェローシップなしのポスドクにも応募していましたが、現地インタビュー前にカリフォルニア工科大から採用を通知されたので辞退しました。

自分が出願したフェローシップについて、以下の表にできるだけ正確にまとめました。期間の1+1年は、“1年+中間審査の結果如何でさらに1年”を意味します。2016年夏～秋にかけて始まる雇用のために、2015年秋～2016年春の間に締切が設定されていたので、ここで紹介するフェローシップの中にはすでに今年度の応募締切を過ぎてしまったものもあります。あくまで大まかな応募スケジュールを知るための資料として頂ければ幸いです。

アメリカの場合、僕が調べた範囲では、フェローシップ無しのポスドク初年度は大学で\$40,000-45,000/年、国立研究所で\$55,000-80,000/年ほどでした。フェローシップがあると少し多めにもらえる上に、給料とは別の研究用資金が\$5000くらい付いてくることもあります。対象分野が広いと当然応募者も増えま

す。Lawrence Fellowは自然科学全般が範囲なので、昨年度は2-4人の枠に150以上の応募が来たそうです。ハーバード大学 Environmental Fellowは、応用物理や化学など理系に限らず、英文学や歴史学でPh.Dを取得した方も採用しています。この他スタンフォード大学Panofsky Fellow、スイス連邦工科大学ETH Fellow、ミュンヘン大学LMU Research Fellowなど見てみましたが、時間がなく応募を断念しました。中には年2回募集しているフェローシップもあるので、ぜひ調べてみて下さい。

## 存在感を出す

日本から支援を受けて来ていた方々は本当に優秀な研究者ばかりでした。一方で、日本から支援を受けると行先ではお客さん扱いで教授と強い関係を築けないとも耳にします。博士過程の間教授から払ってもらった身としては、行った先の国の金を引き出す輩(笑)はやはり無視できないのだと感じました。共同研究者としての関係を対等に続けていくためにも、相手の財布からお金を出してもらうことには、日本からお金を持っていくこととまた違う意義があります。研究業界で日本の地位を維持、向上していく上で、どちらも重要です。

こちらでお世話になった友人、先輩方の中には、今回紹介したようなフェローシップを経て教授になっている方や、各研究所や大学に正規に雇用されて研究・開発に従事している方がたくさんいます。そうした方々の後に続けるように新天地でも頑張ります。



工藤 朗  
マサチューセッツ工科大学博士課程修了  
カリフォルニア工科大学 博士研究員

タイトル	機関	対象分野	2015年度締切	期間	年収
Lawrence Fellow	ローレンス・リバモア国立研究所	自然科学全般	11/1/2015	3年	\$100,000/年
CNI Fellow	コロンビア大学	ナノ科学	11/1/2015	1+1年	応相談
QMI Fellow	ブリティッシュコロンビア大学	ナノ科学	12/1/2015	?	?
Environmental Fellow	ハーバード大学	環境学全般、文科系含む	1/13/2016	2年	\$60,000/年
CEI Fellow	ワシントン大学シアトル校	エネルギー工学	1/15/2016	1+1年	\$65,000/年
H.C. Ørsted Postdoc	デンマーク工科大学	自然科学全般、一部除く	2/23/2016	1年か2年	?
Elings Prize Fellow	カリフォルニア大学サンタバーバラ校	自然科学全般、一部除く	1/31/2016	2年	\$60,000/年
Resnick Fellow	カリフォルニア工科大学	環境科学	3/15/2016	1+1年	\$55,000/年



連載: 子連れ留学珍道中 (2) -そしてこれから...-

娘のその後

娘は学費免除の奨学金を獲得して、ノースカロライナにある歴史の古いプレヴァード大学に入学が決定。学費と入学金は奨学金でまかなっても、学生寮の費用、食費、その他はなんとかしなければならぬ。アメリカにはFAFSA (Free Application for Federal Student Aid) という連邦政府補助の学費ローンプログラムがあり、わたしたちはこれを利用するため、入学に備えて一年前から手続きを始めた。アメリカ市民権か永住権の保持者のみが応募可能で、日本でアメリカ留学を夢んでいる人たちには有意義ではないのでくわしい説明は避けるが、大事なことはこのローンのおかげで、わたしたち親子は大学と大学院教育をそれぞれ無事に終えることができたのだ。しかし娘は入学から一年後、ノースカロライナはちょっと田舎すぎると文句をつけ、フルスカラシップのプレヴァード大学を蹴って、ボストンにあるパークリー・カレッジ・オブ・ミュージックに移りたいと言いつ出した。音楽大学としてはかなり有名な大学で、学費が高いことでも有名。年間300万円以上もする学費を賄う資金などわたしにはない。娘には、学費を自分でなんとか工面するなら移ってもいいということでOKを出し、彼女は政府補助のローンとスターバックスでバリスタをしたり、ベーカリーでサンドイッチを作ったりと、働きながら無事卒業。その後、彼女はまた働きながらニューヨーク・シティ・ユニヴァーシティ (CUNY) で修士をとり、ニューヨークの現代美術館でしばらく働いたあと、いまは自分でアートフィルム関連のNPOを立ち上げ、日本とアメリカの架け橋をしている。彼女もわたしもまだローンの返済が続いているが、なんの後ろ盾もお金もない母子ゆえ、この政府補助のローンの恩恵なくしてアメリカ生活は到底不可能だったし、日本を出てアメリカに移住したことはこの意味でも正しかったといえる。娘にはいろいろと苦労を掛けた。彼女が小学校時代からずっと学生をしてきた母親を支えてくれ、また彼女自身もずっとがんばってきてくれた。そのガンバリは並大抵ではなかったと思う。宿題に追われるわたしはあまりかまってやれず、寂しかったに違いない。

般英語、それに数学の四科目をそれぞれ30分以内にコンピュータで回答するテストだ。英語と数学は四者択一の選択問題になっているが、けっこうひっかけや、ややこしい問題があるので、これらにひっかからないよう練習準備が必要。GREの準備に加えて、一番に大事なことは自分が大学院で何をまなび、どんな研究をしたいのかということを知っていること。それがわかっているならば、その研究を指導してくれるメンターとなりうる研究者あるいは教授にラブレターを出す。もしラブレターが教授の目にとまった場合は、向こうの方からすぐに願書を出すようにと連絡してくれるはずだ。もちろん、このラブレターは、相手とその研究について十分に調査したうえで書く。何かを始める前にはかならず、ホームワーク、下準備を十分にすることが大事。当時アストロバイオロジーの研究者は数えるほどしかいなかったもので、これまでに読んできた論文や、インターネットなどで調べて、それらの研究者のいる大学院に絞って入った。アストロバイオロジーには天文分野からも研究できるので、天文のほうにも進めるようにGREの物理の準備もはじめた。試験などの出願情報の詳細については、米国大学院学生会の資料を参照ください。

出願準備中の頃、ある朝日本から電話が入った。「すぐテレビをつけるように」と。テレビの画面に写ったのは、今まさにツインタワーに突っ込もうとする小型飛行機の映像で、わたしたちはそのあとしばらくテレビに釘づけになった。友人のアパートはグランドゼロから2マイルほどしか離れていなかったもので、その日から金属の熔ける匂いやさまざまな物の燃える匂いと煙の中で眠ることになった。科学図書館のすぐ近くに行方不明者対策本部が設けられ、ビルの壁という壁には写真付きの「探し人」のピラがはられ、普段うるさいくらい活気のあるマンハッタンは重苦しい雰囲気になり込んでいった。GREの第1回目のスコアはあまり芳しくなかったもので、2回目に挑戦。この2回目のスコアを願書とともに出し、お金も尽きてきたので寿司屋でバイトを始めた。ミッドタウンにある寿司屋は昼時は会社員で満席になり、なかなか良いチップが入った。

合格、そしてアリゾナへ

なんの後ろ盾もお金もない母子ゆえ、この政府補助のローンの恩恵なくしてアメリカ生活は到底不可能だったし、日本を出てアメリカに移住したことはこの意味でも正しかったといえる。

入学準備

さて、わたしはというと、娘がプレヴァード大学への入学手続きを終えてドーム (学生寮) に落ち着いたのを見届けニューヨークへ。まずは友人のアパートへ転がり込んで、毎日ミッドタウンにある科学図書館でGREの準備をはじめた。GREとはGraduate Record Examinationの略で大学院への入学に必要な学力が備わっているかどうかを評価するテストのこと。一般と専門科目があり、一般試験は文章力や論理的思考力を使って書くエッセイ2本、一



Fig.1. アリゾナ州立大地学部での岩石学のフィールドワークで。筆者は右から2番目。

春の気配も深まりマンハッタンもすこし活気をとりもどしたころ、応募した大学院から手紙が届いた。すでに2通ほどrejection letterを受け取っていたので、アリゾナ州立大学から面接に来ないかという手紙を受け取って、どんなにうれしかったことか。この大学のあるテンピ市はフェニックス市の隣に位置し、赤い砂漠の中にあるにも関わらず、サルトリグヴァー(塩川)といって塩分の高い川による灌漑でレモンやオレンジ、ユーカリなどの樹木に溢れていて、シトラスの芳しい香りに包まれていた。指導教授と研究室で面接のあと学部内をいろいろ見せてもらい、プログラム・コーディネーターから紹介してもらった研究生の家に泊めてもらうことも決まっていたので、実際に学生にあって話を聞くこともできた。そして8月、わたしはアリゾナ州立大学の地質科学の大学院に入学した。

## 留学生活

アメリカの科学系の大学院は、大抵の場合学費免除の制度に加え、学部やプロジェクトが獲得した研究費であったり、あるいは教授たちが独自に獲得した研究費から、学生健康保険も完備してお給料も出る。ただ、給料をもらうためにはTA( Teaching Asistant)かRA( Research Assistant)として雇ってもらわなければならない。RAは教授のアシストをして学部生のテスト採点、レポートのレビューやレクチャー準備などでお給料がもらえ、RA( Research Assistant)に採用されれば教授の研究アシスタントとして、研究しながらお給料がもらえる。このお給料のことをスタイペンド(Stipend)という。奨学金などを自分ですでに取得している人は大学院を探すにあたってそれなりに有利だ。なぜなら大学院では限られた予算内で院生を雇うというか入学させるので、この限られた人数の中に入るための競争は厳しい。けれども学部のお金を使わないということであれば、大学院側はけっこう喜んで入れてくれるようだ。アメリカでは大学院生というのは安い給料で働いてくれる大事な研究労働力でもある。この時のわたしのRAとしてのお給料はたしか日本円で20万円ぐらい。アリゾナ州は物価がとても安いので、生活するには十分で病気の時は大学内のクリニックで見てもらえるし、カウンセリングにも保険が効く。卒業論文を書き始めたころ教授のレビューで真っ赤になって帰ってくる論文が二度三度と重なってくると、どっと落ち込んだ。こんなときはハンサムな先生のヨガクラスにいつてみっちり身体をつかい、深い呼吸で汚れた気分や落ち込みを吐き出した。ここでとても大事なことを言っておきたい。わたしの指導教授はアストロバイオロジーではかなり有名なひとだ、でも女子学生に対して偏見を持っているということ卒業



Fig. 2. 日本の母校で子供たちに火星について講演。熱心に耳を傾けてくれる子供たち。

間近になって知った。この教授の研究室に入ってくるほとんどの女子学生が修士で卒業、そしてわたしの知っている数人は卒業論文からジャーナル論文を発表できずに終わっている。わたしもその一人で、卒論はすでに完成してジャーナルのドラフトもできていたにも関わらず、ついに発表せずじまいだった。ということで、この経験を踏まえて、ラブレターは目当ての教授だけではなく、その研究室にいる学生にも出して教授の人となりをお確かめしておくことをお勧めする。

## 就職、そしてこれから...

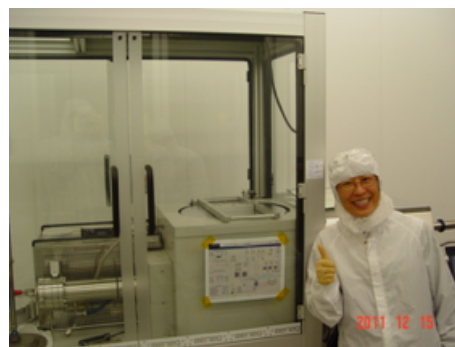


Fig.3. クリーンルーム内での仕事は天体観測用のポロメーターなどの開発。原子レベル蒸着機(Atomic Layer Deposition System)の前で。

マスター(修士)をとって卒業後、とんとん拍子に事が進んでアメリカ航空宇宙局のゴダード宇宙飛行センターに就職。ゴダードは地球観測衛星の開発、運営、ハッブル宇宙望遠鏡の開発など、また火星で活躍するローバーに搭載されている質量観測機器のテストベッドも備えていて、観測データの解析と分析ばかりではなく解析方法の開発などもおこなっている。ここで、わたしは隕石に含まれる1ミリ程度の大きさの球状粒子の地場研究や、隕石落下によってできた特殊な形状に割れる岩石の地場観測により落下時の衝撃波の大きさなどを推測したり、火星に送る質量分析器のマイクロ圧力計の較正評価、天体望遠鏡の検知器などの開発をして10年ほど働いた。その間、日本へ帰国する度にチャンスがあれば、火星の探査ミッションなどについて子供たちに聞いてもらったりもした(Fig. 2)。わたしは永住権をもっているが、市民権は持っていない。これまではなくてもやってこれたからだ。しかし、ここ数年政府予算はどんどん削られてきており、ドクター(Ph.D)も市民権も持たないわたしはつい最近NASAでの職を失ってしまった。さて、これからどう再起をはかるのか。やはり、やりたい仕事をやっていくためにはPh.Dが必要なのではないかと考えているが、さてどうするか。



足立 智子  
エンジニアリング/ビジネス・コンサルタント及び通訳  
エヴァグリーン大学卒、アリゾナ州立大学院修士



## 寄稿: 私の大学院選び -ライス大学での院生一年目-

## 経歴

初めまして!テキサス州ヒューストンにあるライス大学、材料科学専攻Ph.Dコース2年目の加藤圭衣子と申します。私は、高校1年の時に親の転勤に伴いアメリカへ引っ越し、今年でアメリカ生活10年目に突入します。高校卒業後はイリノイ大学アーバナシャンペーン校で材料科学を専攻し、2015年からライス大学でリチウムイオン電池の研究をしています。今回は特に理系大学院留学を考えている学部生の方々に向け、私が大学院を選ぶ際に考慮した(すべきだった)点やライス大学での生活など少しでも役に立つような情報を共有できたらなと思い執筆させて頂きました。

## 5-6年かかるPh.Dなんて…

初めに、まずなぜ私が大学院進学を決意したか話します。私は大学3年生まではPh.Dに進む事だけは有り得ないと思っていました。2年生の時から研究には携わっていたものの、4年生になるまで研究の面白さがわからなかったのと、女性としては29歳まで学生というのが想像しづらく学部卒業後は企業で働こうと思っていました。2年の秋、なんとなくボストンキャリアフォーラムに参加し就活を始めました。しかし、志望動機がはっきりしておらず面接は見事に全て落ち、自分は将来本当は何がしたいのだろうと初めて真剣に考え、材料を学んでいる時が一番楽しいと気づき研究の道を視野に入れるようになりました。そして4年生の時にイリノイ大発の電池のベンチャー企業でインターンをさせて頂いた際、技術転換、材料の商業化を目の当たりにし、将来はこういう仕事をしたいと思い、そのためにはPh.Dが必要だ!という流れでPh.Dコースに進む事決めました。

## 口コミの大切さ

大学院選びというより研究室選びをしっかりとすることがいかに大事か、大学院生活1年目で学びました。指導教官と相性が合わず研究室や大学院を変える人、3年目になってクビになる人を見てきて、研究室を決める前の下調べの大切さを再確認しました。研究内容、論文の質、数と同じくらい大事になるのが教授との相性、研究室の雰囲気、Diversityはあるか、教授の研究の回し方、卒業にかかる年数、卒業生の進路先、インターンシップさせてもらえるかなど、とにかく口コミでしか得られないような情報を集める事が大切です。日本からだ実際に訪問して聞くのは難しいので、研究室のホームページから学生のメールアドレスを取得し、どんどんメールすることをお勧めします。大学院生は自分も昔、研究室選びをした身なので意外と親切にメールを返してくれます。私も候補としていた研究室の院生の方と電話もさせて頂きそこで得た情報がとても役立ちました。もちろん他人の意見を真に受けるのはよくありませんが、なるべく多くの情報を集め、自分に適した研究室を選ぶのが充実した5年間を過ごすためへの一歩なのではないかと思います。

研究室のホームページから学生のメールアドレスを取得し、どんどんメールすることをお勧めします。

## 設立3年目ライス大学材料科学&amp;ナノ工学部

私はライス大学を受験したものの、正直訪問するまで候補にいませんでした。しかし学生、教授方と話すごくアットホームな雰囲気な学部と申し分のない美しいキャンパスに惚れ込んでしまい(Fig. 1参照)ここしかないと思いライス大学に進学する事に決めました。このように感覚的な部分で選んだ部分もありますが、他にも私がライスを選んだ理由が主に3つあります。一つ目は、もともと機械工学と一緒にいた材料工学部が3年前に独立し新しい学部ということもあり、学生、教授軍から活気を感じたからです。学部生、院生ともクラスの運営などに意見を出し教授に掛け合い、学部をもっと良くしていこうという活動が活発という点が私は惹かれました。二つ目は、材料科学とナノ工学部に限っては必修授業が少なく(6クラス12単位)、Ph.D一年目から研究に専念できるという点です。一年目から研究をさせてもらえるので、卒業にかかる年数が4~5年と他の大学院に比べると一年ほど短くなります。私は早く卒業して企業で研究したかったので、4~5年で卒業できるというのはとても魅力的でした。三つ目は、ヒューストンという全米のエネルギー、化学関係の企業が集まっているという立地条件です。自分自身を含め、私の研究室は半分近くの学生が企業から出資されている研究に携わっています。共同研究を通じ学生のうちから企業の方と繋がれるという点は魅力的です。最後に補足ですが、ヒューストンはアメリカ第四の大都市ですが、物価が安いというのも学生の私にはとても魅力的でした。



Fig. 1. 一目惚れしたライス大学のキャンパスの様子。

## ライスでの生活、一年目を終え

### ～研究～

Ph.Dに進む前は、学部時から研究もしていたし、同じように学校に通うのだから大学と大した違いはないと私は考えていました。しかし間違っていました。学部時は実験を手伝っていただけであり、自分で与えられてプロジェクトを動かしていくのが本来の研究であることにPh.D一年目で気づきました。実験に時間はかけているものの結果が伴わなく常にもがいているのが私の一年目でした。結果がでない時にどこらへんで見切りをつけるかや、色々な方向からアプローチをかけ並行して実験をすることの大切さなど身をもって学びました。教授がインド人ということもありインド人が多い研究室なのですが、家族のように温かい人間関係を築くインド人の同僚の優しさに救われることも多かったです。Fig.2は、ホームパーティーに招いて頂いた際に描いて頂いたヘナタトゥーを記念に同僚と撮った一枚です。アップダウンありますが、毎日新しい発見と学びがある大学院生活は楽しいのでPh.Dに進んで良かったなどと思います！



Fig. 2. 同僚のホームパーティーにて、いつもお世話になっているボストクのFarheen(真ん中)と同期で研究室に入ったSandhya(右)とです。

### ～他の活動～

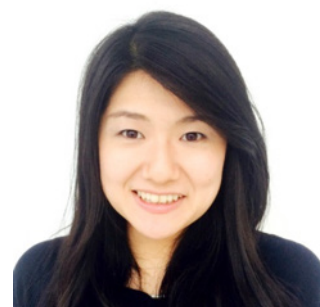
私がライス大学でもう一つ力を入れているのが、日本の理系学部生を対象としたライス大学での研究インターンシッププログラムのサポートです。私が材料に興味を持ち始めたきっかけは高校生の時に参加したサマーキャンプにあります。夏休み一週間だけイリノイ大学に泊まり色々工学部の分野を学び材料科学という学問を知りました。また研究を始めたきっかけもResearch Experi-



Fig. 3. 2016 TOMODACHI-STEM @Rice University Program の学生さん、プログラムコーディネーターのSarahと撮った写真。

ences for Undergraduates (REU)というアメリカの学部生対象の夏の研究プログラムです。アメリカにはこういったインターンシッププログラムがたくさんあり、学生が授業外で科学の面白さを学べる機会が豊富に設けられています。私はこういう機会を経験する日本の学部生が増えてほしいと思い、ライス大学電気工学学科教授の河野淳一郎先生が率いる「中谷RIESフェローシッププログラム」と「TOMODACHI-STEM@Rice University Program」に携わっています。それぞれのプログラムで毎年5～10人ほどの学部生が1か月ほどライス大学の研究室に配属され海外での研究経験ができます。Fig.3は第一回目TOMODACHI-STEM@Rice University Programの学生さんたちとの写真です。研究以外にもヒューストン観光やWashington DCでScience Policyを学ぶツアーなども組み込まれており本当に素晴らしいプログラムです。また渡航費、滞在中のホテル代などほとんど助成されているので将来、海外の大学院を考えていて、海外大学院生の様子をもっと知りたい学部生の方々にぜひ応募して頂きたいです！

長文になりましたが読んで頂きありがとうございました。



加藤 圭衣子  
ライス大学 材料科学&ナノ工学部博士課程

(学生会からのお知らせ) 2016年冬季の、海外大学院留学説明会の開催情報をお伝えいたします。今冬は、右記の11大学にて説明会を開催します。すべての会場で、参加費は無料で、社会人の方や学外の方もご参加いただけます。事前参加登録なしでも聴講いただけますが、会場が満席になった場合には登録された方を優先させていただきますので、ぜひ事前登録にご協力ください。事前登録はこちら: <https://goo.gl/forms/h4l2kKYj4ZtCCbMf2>  
詳しい情報は学生会のウェブへ: <http://gakuiryugaku.net/>

【開催日・開催会場】  
12月19日:九州大学、京都大学  
12月20日:神戸大学、一橋大学、国際基督教大学  
12月21日:岡山大学、東北大学、慶應義塾大学  
12月22日:早稲田大学  
12月23日:東京大学  
12月26日:大阪大学

(編集部)



## 連載: 行き当たりバッタリのアメリカ生活23年(1) 大学院1回目

私は1993年に留学のために渡米した。気がつけば23年。時々自分でもギョッとする。そのうち過去10年間は、国際情勢の分析を専門とするニューヨークのコンサルティング会社、ユーラシア・グループというところで仕事をしている。ユーラシア・グループは、地政学的リスク分析を専門とする会社で、国や地域の政治的変動がビジネス環境に与える影響について、顧客に対しアドバイスをを行っている。現在およそ50社の日本顧客のマネジメントと新規開拓、マーケティングを行うチームのヘッドを務めている。

国際関係に興味をもつ日本人の大学生・大学院生の方々から、「卒業後、渡邊さんのような仕事につくためには、どういう準備をしたら良いでしょうか」と聞かれるたびに、「若いうちはあまり将来を先回りして考えすぎず、自分の好奇心に忠実に、その時その時目の前にあることを一生懸命やり、なんでも経験してみる。それを続けていけば、自然と面白いことに出会えるはず。」などと、我ながらあまり役に立たなそうなアドバイスをしている。

## 目の届く限り遠くまで行け

銀行家J・P・モルガンの名言で「目の届く限り遠くまで行け。そこまで行ってみれば、もっと先が見えるだろう」というのがある。自分もそうやって進んできた気がする。とりあえず、行けるところまで行ってみないと、その先のことは見えない。行ってみてはじめて、「こんな景色が広がっていたのか」と知り、次に繋がるのだ。スティーブ・ジョブズが言うところの「自分の人生を振り返ってみると、一見ランダムに見える点実は繋がっていた」というのと同じことだ。

現代の若者たちは、テクノロジーのおかげもあり、私が学生だった頃に比べると手にできる情報量が遥かに多いし、社会全体をみても様々な面で効率性が上がっている。でも、私は、目的地に最短距離で到達することが必ずしもプライオリティではないと思って生きてきた。プライオリティは、自分自身がその歩いている道を楽しむかどうかだ。その結果思いがけないところに行き着くとしても、それが人生を豊かで、驚きに満ちた、面白味のあるものにしてくれる。

私はこの23年の間に、アメリカで大学院に2度行き、ニューヨークで仕事を2つ経験した。当然私自身が選んだ道だがこれは、偶然、与えられた縁、動物的勘などによるところも大きかった。「どうしてもアメリカに住みたい」「どうしてもニューヨークで仕事がしたい」という強い希望や計画があったわけではなく、帰国子女でもなく、大学まで日本でごく普通の教育を受け、ろくに英語も喋れない状態でこの国に飛んできた私がなぜ二度も大学院に行き、就職先を見つけ、アメリカ人の中で仕事をして生き延びてきたか、これから留学を考えている人たちの参考に多少でもなればと思う。

一つ目の大学院:  
マサチューセッツ州立大学アマーフト校

私は1993年の夏、先のことはまったく深く考えずに日本を発った。外の世界を見てみたいという単なる好奇心、外国の大学院で勉強してみたいという目先のゴールだけを考え、その先のことは

一切白紙だった。1993年の日本では、インターネットもないので、願書の取り寄せも出願もすべて郵便、資料といえば学校が送ってきてくれたパンフレットだけ。アメリカ在住経験のある知り合いなどから話を聞いて情報を集めるのがせいぜいだった。それを元に20くらいの願書を片っ端から送り、最初に合格通知をくれたマサチューセッツ州立大学アマーフト校に行くことにした。それ以外にもいくつか後から合格通知をもらったが、当時その院にいた日本人の助教授が直筆で親切な手紙を送ってきてくれたことが1つの決め手だった。それにしても、下見にも行かず、よく決めたものだと思う。行ってみた先はボストンからバスで4時間もかかる田舎の大学町だった。

最初の院での専攻は政治学だった。これも、「大学時代は法学部だったし、世の中の仕組みを学ぶのには政治学なんかがいいかな〜」という程度の単純な考えだった。入ってみたら同級生のほとんどがアメリカ人、日本人は私一人。そして後に、「政治学は、歴史や文学と並んで、日本人にとっては選んではならない専攻だ」ということを知った。読ませられる文献の量が膨大であるうえに、言葉が勝負だからだ。

## Critical Thinking

案の定、ただでさえも読むのが遅いのに、恐るべき量の課題書籍を出され最初は寝る間もなかった。プラトン、アリストテレス、ギリシャ悲劇、シェークスピア、マキャベリなどの古典から、マルクス、エンゲルス、トクヴィル、ニーチェ、聖書まで、教材も難解なものばかりだった。課題は基本的に、これらの偉大な思想家たちの著書を読んでそれを「批評」せよ、というものだった。こっちは読むだけでも精一杯なのだが、それに対してどういう突っ込みをするかを考えてから授業に行かないといけな。今でも覚えている期末レポートに「マキャベリが生きていたら、ビル・クリントン大統領のソマリア政策に対してどんなアドバイスをするとするか述べよ」という問題があった。最初はこういう課題には悩まされたが、こういった課題は時間が経つに連れて面白いと思えるようになった。たった一つの正解などないのだからクリエイティブになれる。教授は、素っ頓狂なアイデアでも理屈さえ通っていれば「なるほど面白いね」と励ましてくれる。

英語で言うところの「Critical Thinking」というスキル、つまり、どれだけ自分が読んだものを本当に消化して、その上で批評的に分析し自分の言葉で議論できるか—これは、アメリカ社会で生きていくためには非常に重要な能力だと思う。子供の頃からその訓練をしているアメリカ人たちと肩を並べて学んだり仕事をしたりする上でこれができないと、議論の場において「貢献していない人」「いる意味がない人」になってしまうからだ。ただテーブルに座っているだけでは参加したことにならない。これは日本とは考え方が根本的に違うところだと思う。

ろくに深い考えもなく政治学を専攻したこと自体は浅はかだったかもしれないが、振り返ってみると、あの時西洋の古典・近現代哲学の名著を一通り読まれたのは、西洋社会で生きていくうえ

に必要な教養のベースをある程度身につけるとい意味でとても良かった。これは後の話だが、二度目の大学院の「倫理」の授業で、「論語」を扱った時、私には自然にすんなり納得できること、たとえば「其の身正しければ、令せずして行はる」といった考え方が、アメリカ人やヨーロッパ人の同級生たちには、エキゾチックで新鮮なものと捉えられているようだったのが面白かった。

## 社会人経験

同級生に社会人経験を経て学校に戻ってきている人たちが何人かいた。人生経験がある分、彼らの発言する内容や視点は、私にはない厚みのあるものに思われることが多かった。それもあって、「社会に出てから、また大学院に戻って勉強してみたいものだ」という思いを持つようになっていた。そのほうが自分にとって得るものも大きいと同時に、自分が授業に貢献できる度合いも今より大きいだろうと思ったからだ。

大学院を終えた私は1996年夏、インターンシップを経てニューヨークのジャパン・ソサエティに就職した。ジャパン・ソサエティは日米の相互理解推進を目的とするアメリカの非営利文化教育団体で、ここに私は8年にわたり勤めることになる。私は、その講演部で、日米の研究者、芸術家、政財界人、建築家、作家、デザイナー、ジャーナリストなど各界の専門家を講師に迎えての講演会や会議、人材交流プログラムの立案・運営を担当した。この仕事を通じて、幅広い分野の第一人者の方々とは仕事をする機会に恵まれ、

一生の財産になるような出会いも数多く得ることができた。私は知的刺激と様々な出会いに満ちたこの仕事がとても好きだったが、中堅として仕事を任されるようになってきた頃、また自分をプッシュしたいという気持ちが強くなってきた。次回は二度目の大学院で学んだ経験について触れてみたいと思う。



渡邊 裕子

ユーラシア・グループ 日本顧客担当部門 ディレクター  
ハーバード大学ケネディスクール行政大学院 行政学修士  
マサチューセッツ州立大学アマースト校 政治学修士

Yuko Watanabe | Director, Japan Client Services  
Eurasia Group | 149 Fifth Avenue | 15th Floor | New York, NY | 10010  
watanabe@eurasiagroup.net  
eurasiagroup.net

## 米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

### 【ニュースレター編集部】

石原 圭祐      高野 陽平      辻井 快  
佐藤 拓磨      松島 和洋      塚本 翔大

[newsletter@gakuiryugaku.net](mailto:newsletter@gakuiryugaku.net)

執筆者を募集中!

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動（留学説明会、メンタープログラム）に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。

<http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php>

## 編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 <http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります!

年末は留学生も里帰りの季節。私も父の誕生日を口実に毎年年末は帰国することにしております。留学生活が長く私でも友達には恵まれ、帰国した際にはちよくちよく友達と遊びに行ったりもするのですが特に繁華街は新陳代謝が活発です。行くたびに新しいビルが建ったり昔からあったお店がなくなっていたり。慣れ親しんだ自分の地元の街並みをいつも懐かしさと共に新鮮な気分で見ることができるのは普段日本とは全く違う街に暮らす海外留学生の特権の一つだと感じています。もうすぐ帰ります(辻井)。

最近少しずつですがドイツ語を学び始めています。語学にまとまった時間を割くのは難しいのですが、簡単な表現(と言っても覚えている内容にはかなりムラがありますが…)や数字は徐々に使えるようになってきました。たまに店員さんや電車内でのアナウンスが理解できると嬉しくなりますが、こういう成功例はごくわずかで、実際は勘違いや間違えの方が多いです。そのおかげで?ここ数ヶ月はドイツ人の同僚に「ドイツ語学習であった僕の勘違い」と題して笑いのネタを提供しています。機会があればそのうちネタを披露

します。(高野)

サンクスギビングデーの11月24日、友人2人と手料理を持ち寄ってパーティをしました。ひとりはターキー(七面鳥)の丸焼きとパンプキンパイを、もうひとりはスペアリブを、僕は日本男児らしく(?)カレーを作りました。毎日実験して過ごしているせいか、われわれ化学系学生のお料理スキルは捨てたものではないようです。ついつい食べすぎてしまいました。最後に、骨付きも肉を使うと肉がほろほろと柔らかなチキンカレーを作れるので、みなさんもぜひお試しください。(塚本)